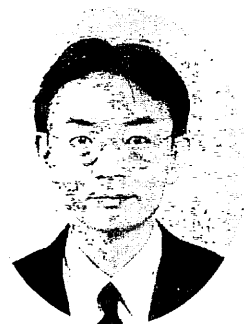


# 教授就任

## 脳神経病態制御学講座 精神医学

### 尾崎 紀夫



#### 〈略歴〉

昭和57年3月 名古屋大学医学部卒業  
 昭和57年5月 社会保険中京病院臨床研修医  
 昭和59年4月 名古屋大学医学部精神科医員  
 昭和62年7月 中部労災病院精神科医師  
 平成2年5月 名古屋大学医学部医学博士号取得  
 平成2年7月 米国 National Institute of Mental Health Visiting Fellow  
 平成7年9月 藤田保健衛生大学医学部精神医学教室講師  
 平成10年5月 藤田保健衛生大学医学部精神医学教室教授  
 平成15年10月 名古屋大学大学院医学系研究科脳神経病態制御学講座精神医学分野教授

#### 〈業績〉

1. Ozaki N, Goldman D, Kaye W, Plotnicov K, Lappalainen J, et al.: Serotonin Transporter (SERT) Missense Mutation Associated with a Complex Neuropsychiatric Phenotype. *Mol Psychiatry* (in press)
2. Suzuki T, Iwata N, Kitamura Y, Kitajima T, et al. and, Ozaki N: Association of Novel Genetic Variants in the Serotonin 5-HT<sub>4</sub> Receptor Gene (HTR4) with Japanese Schizophrenia. *Am J Med Genet* 121B (1): 7-13, 2003
3. Iwata N, Ozaki N, Inada T, Goldman D: Association of a 5-HT<sub>5A</sub> receptor polymorphism, Pro15Ser, to schizophrenia. *Molecular Psychiatry* 6 (2): 217-219, 2001
4. Ozaki N, Manji H, Lubierman V, Lu SJ, Lappalainen J, et al.: A naturally occurring amino acid substitution of the human serotonin 5-HT<sub>2A</sub> receptor influences amplitude and timing of intracellular calcium mobilization. *Journal of Neurochemistry* 68 (5): 2186-2193, 1997
5. Ozaki N, Ono Y, Ito A, Rosenthal NE: Prevalence of seasonal difficulties in mood and behavior among Japanese civil servants. *Am J Psychiatry* 152 (8): 1225-1227, 1995

このたび、平成15年10月1日ついで、名古屋大学大学院医学系研究科脳神経病態制御学講座精神医学分野の教授を拝命致しましたので、紙面をお借りして学友会会員の皆様にご挨拶申し上げます。

近年、「こころ」の問題は社会の一大関心事となり、精神医学に対する期待と要請は高まっております。この精神医学に対する社会的要請の高まりを裏付ける以下のような疫学的事実も明らかになっております。1) 多くの精神障害の発症頻度は高いが、しかるべき医療的対応を受けていない患者も多く、その結果自殺等の大きな社会的損失がもたらされている。2) 身体疾患患者は精神障害を合併する頻度が高く、精神医学的介入が身体患者のQOLの向上、ひいてはその疾患自体の予後のために有用である。この様な実証的データを受け、近年、文部科学省が発表した「医学教育モデルコアカリキュラム」や

厚生労働省が発表した「医師国家試験基準」および「卒後研修必修化ガイドライン」は、卒前・卒後の医学教育における精神医学の重要性を強調しております。今後、名古屋大学医学部で行う精神医学の臨床・教育・研究は、この社会的要請に応えるべく努力することが最も重要と考えております。

私は名古屋大学医学部を昭和57年に卒業し、昭和59年から62年まで医員として在籍いたしましたが、永らく名古屋大学の外におりましたので、大学院大学化を果たし、独立法人化直前にある名古屋大学の現状に関しては不明の点が多く、これから何をなすべきか、細部の方策は模索中の段階です。しかしながら、臨床の基本理念は「患者の生物・心理・社会的側面に配慮し、実証的データと患者・家族のニーズに基づく精神医療の実践」であり、日々の臨床が「新たな実証的データを作成するための研究」に繋がることを目指し、「臨床と研究の成果と方向性を伝え、ひろめるのが教育である」という、これまでの基本方針は、今後も継続していこうと考えております。

現在、名古屋大学が直面している状況を踏まえて、今後の方向性を若干述べさせていただきます。大学院大学化したことで、より高度な研究成果の創出が問われる点に関しては、今まで進めて参りました精神障害の病態生理解明、とりわけゲノムレベルからのアプローチに、神経科学諸領域の知見や心理社会的環境因子も加味した研究を推し進め、病態生理に基づいた治療・予防法の開発を目指す所存です。加えて、日々の精神科臨床の中で生じる課題に関する実証的なデータを明らかにする研究にも一層力を注いでいきたいと思っております。また、独立法人化に関しては、学生への教育サービス、患者への診療サービスを重視していこうと考えております。

最後になりましたが、これまで学友会の諸先生のご支援を得て、臨床・教育・研究を行って参りました。この場を借りまして、皆様に御礼を述べさせていただきますと同時に、今後、より一層皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## [教授就任インタビュー]

—これまでのご研究やご活動をお聞かせください。

中京病院でのローテート研修終了後、名大や中部労災病院精神科でリエゾン精神医療や職域のメンタルヘルス活動を行うとともに、生体リズムと精神疾患に関する研究や精神疾患の基礎に関わる神経化学的研究などを行いました。

リエゾン精神医療では、例えば、腎移植後の患者さんが他人の臓器を自分のものとして心理的に統合する過程に精神医学的にサポートすることなどに取り組みました。その後、米国 NIH に留学して、季節性感情障害の病態生理研究や、統合失調症や気分障害の分子遺伝学的研究を行いました。また、NIH 留学中も臨床に関わることのできる資格を取得して診療や患者会に携わっていました。

帰国後は、藤田保健衛生大学に奉職し、診療面では社会技能訓練 (SST)、認知行動療法や心理教育の導入、研究面では NIH 留学中から着手していた分子遺伝学的研究を日本でも立ち上げるとともに、気分障害・不安障害の人格傾向や臨床精神薬理学、疫学的な研究を新たに行ってきました。さらに教育面では、教務委員としてモデルコアカリキュラムを踏まえた改革や、卒後研修必須化 (中でも精神科の必須化) を踏まえた改革などに取り組んできました。

—今後の抱負はどんなことですか。

第一に、精神医療の対象を拡大することです。そのためには卒前・卒後教育をより充実させ精神科医を育てるとともに、精神医療を理解してくれる医療者を増やして他の診療科との連携を深めたいと考えています。例えば、自殺死する方の半数以上が精神疾患を罹患しているにもかかわらず、精神科を受診していた自殺者はわずか 10-

20%にすぎず、多くは他の診療科を受診していたというデータがあります。この点を考えると、他の診療科と連携を深めることで、他の科を受診している患者さんの中から精神科がフォローすべき方を見つけ出し、しかるべき医療的対応を行う必要があると思います。

二つ目は、Bio-psycho-social な視点をもった診療・教育・研究を行っていくことです。これは精神科に限らず、あらゆる診療科において重要なことですから診療上、教育上留意して行きたいと考えております。また、研究面においても精神医学分野で多面的アプローチを行うことが真の病態生理探求上重要と考えております。

加えて、診療上何よりも重要なことは、診療を決定する要素が「医師の臨床経験」「Evidence」に加え、「患者・家族のニーズ」であることを意識することであり、この三点を踏まえて最良の診断・治療をしていきたいと思えます。

—名大の学生に何かメッセージをお願いします。

私は、決して医学全般に関して真面目な学生だったとは言えませんが、心理学や精神医学にはもともと興味があったため、その勉強には早くから取り組んでいました。その後、実際の臨床をはじめてみて上に述べたような多面的な要素が診療上必要なことに気づき、勉強をするようになりました。学生の皆さんも何か一つ自分が興味の持てることを見つけてほしいと思います。その結果、自分の中で学習のモチベーションを高めていけば、そこから広がりを持った勉強ができると思います。また、患者さんに関しては、一人の患者さんをいろんな側面から考えられるようになることが大切だと思います。精神医学や人の心に興味のある方や、あるいはゲノムや神経科学に興味を持っている方は気楽に御連絡ください。

(インタビューア 浅野 実奈子)